Japanese Association for Religious Studies

制度に少なからず影響を与えてきたと考えるのが妥当であろう。しかしCohenの論点は、今後のユダヤ教理解に有益な視点を提示するものの、古代後期、特にギリシャ・ローマ時代におけるエスニシティー及びそのアイデンティティ形成の枠組みがどの程度まで定義できるのかという問題・視点を提起していない。

ユダヤ教研究と並行して、特筆すべきなのがJ.M. Hallをはじめとする古代ギリシャ及びヘレニズム期におけるエスニック・アイデンティティ研究であり、ユダヤ教研究に有益な視点及び方法論を提供すると思われる。ヘレニズムという一つの普遍的思想潮流の文脈から、外部の人間による宗教・文化・慣習の受容を通して、特定のエスニック集団に帰属しその成員として自己規定してくというモデルは、ユダヤ教のアイデンティティ形成の枠組みを理解する上で重要な観点を提示するように思えてならない。本発表ではユダヤ教のアイデンティティを考察するにあたり改宗制度に焦点を当て、ラビ・ユダヤ教共同体における改宗者の位置付けがラビ・ユダヤ教の人間観及びその自己規定を理解する上で重要なキータームであることを提起し、ラビ・ユダヤ教におけるアイデンティティを出自・文化慣習を含んだ包括的なエスニック・アイデンティティであるものと位置付け、その流動性及び相互浸透性を説明、定義するべく、Hallらによるヘレニズム期におけるエスニック・アイデンティティ研究に依拠し、ラビ文献におけるユダヤ・アイデンティティ形成との比較検証を行う。具体的なラビ文献の検証にはパレスチナ・タルムード、ビクリーム篇1章：4、64a項を一次資料として用い、主に農産物の初物の献上及び申命記26章：3節の聖句の祈禱を唱える規定において、他の共同体の成員と照らして合わせる形で、改宗者はどのような義務を課され共同体に帰属していくのかという議論を通して、改宗者はラビが想起、理解するであろう「イスラエル」というエスニック集団の範疇に含まれるのか否かという考察を試みることで、古代におけるエスニック・アイデンティティは流動的かつ浸透性を有する文化構築物であることを注意喚起するものである。

スピノザとユダヤ世俗主義
――ヴァイレルのユダヤ神権政治より――

平岡光太郎

本発表では、現代イスラエルにおけるオピニオン・リーダー的存在のゲルション・ヴァイレル（一九九四没）の著作である『ユダヤ神権政治』において、『神学・政治論』がいかに読まれているかを考察し、これによって現代ユダヤ世俗主義のスピノザ受容の一端を明らかにすることを目的とする。ヴァイレルはテルアビブ大学哲学学科の教授だった。彼は、ハンガリーのユダヤ教育に熱心な家庭に生まれ、第二次世界大戦を通し家族の全員を失い、その直後からユダヤ教の戒律を守る事を止めている。ヘブライ大学ユダヤ思想学科のゼエブ・ハーヴィーは、ヴァイレルを「熱心な世俗主義者」と評している。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ヴァイレルは『神学・政治論』を読む際、神権政治が、市民的領域と政治的領域の区別がない国家として論じられている第一七章へ重点を置く。そして、いかにして神権政治が支配構造として不可能になったかをスピノザが証明している、とヴァイレルは主張する。彼によれば、この証明をデ・ウィットのキリスト教的政策や哲学の未来へ関係するもののように注解することは、全くむなしいことであり、「我々」がスピノザのこの章を文字通りの意味として読める第一世代である。過去にあったヘブライ神権政治国家には、律法を解釈し、神の応答を伝達する権利をもつ者と、その解釈と応答に従い運用する権利をもつ者がいた。この二つ権利が奔走して競り合ったため、国家は没落し、最後には崩壊した。

またヴァイレルは、スピノザ以前のユダヤ思想家がトーラーをある種の国家法のように語ったことを指摘する。それらの思想家たちへの批判として、トーラーがあらかじめ国家の存在を仮定していたのであったならば、国家の不在（離散）においてトーラーの戒律の履行を要求することは矛盾しているという見解がきわめて論理的であるとヴァイレルは主張した。そして彼は、この政府が倒れたゆえに、その法自身の効力も失効したと考える。

第三章のユダヤ人の国家再建の可能性について、適した時期が到来し、そして彼らの宗教が彼らの脳を軟化させることがなければ、その民族には政治的希望が当然あるとヴァイレルは主張した。そして彼によると、神権政治の基礎の上にユダヤ人の政治的な力の刷新を、スピノザは予見しなかった。もし基礎的教説として神権政治を利用するなら、その本質に刻まれた破壊的な傾向が、再びユダヤ国家を必ず崩壊させるとヴァイレルは考えた。彼によれば、おそらく、唯一「我々」がある程度の自信をもって言えるのは、ユダヤ国家を理性と国政術的知恵の理解が支配し、祭司や迷信がそれを支配しないことをスピノザが望んでいたということである。この「我々」という表現は、特に現代イスラエルの人々に向けられていると考えられる。その理由は、ヴァイレルが初めに英語で『ユダヤ神権政治』を著したにも関わらず、これを友人に渡し、ヘブライ語への翻訳を求めたことによる。こうして一九七六年にヘブライ語版が刊行され、英語版は一九八八年に出版された。

ヴァイレルがユダヤの政治性の刷新の根拠とした『神学・政治論』の第三章は、理論的社会主義を展開させたモーシェ・ヘス、イスラエル国の初代首相のダヴィッド・ベングリオン、また二〇世紀のアメリカのユダヤ系政治哲学者であるレオ・シュトラウスなど、数々のユダヤ人に問題とされてきた。ユダヤ教を破門され、トーラーの戒律に対して痛烈な批判を行ったスピノザは、現代もなおユダヤ人に受容され続けている。ユダヤ人が国家を再建する可能性に言及したこの箇所は、現代イスラエルにおけるスピノザ受容の大きな要因の一つとなっている。

NII-Electronic Library Service